

中津干潟の保全活動

特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会

1. はじめに

いきなりで申し訳ありませんが「中津干潟」という名前を聞いたことがありますか。おそらく、ほとんどの方は「知らない」とお答えになるのではないのでしょうか。私たちのしごとは「中津干潟」を「富士山」と同じくらい、広く人々に知ってもらうことです。日本中、世界中の人々にその価値を認めてもらい、誇りとされるような場所になることを願って活動を続けています。わかりやすく言えば、みなさんに中津干潟を大好きになってもらいたいのです。

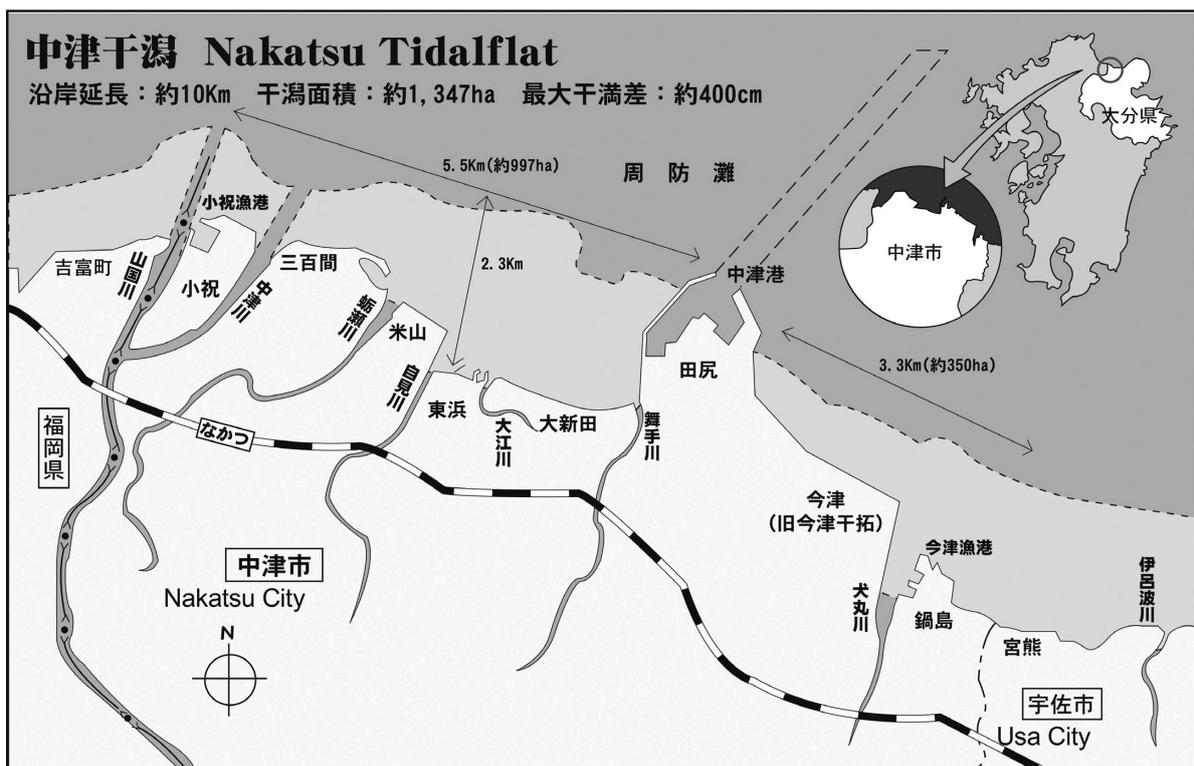


中津干潟

2. 中津干潟とは

「中津干潟」は、福岡県東部から大分県北部に広がる豊前海干潟の一部になります。この地域に広がる干潟は瀬戸内海最大の広さがあり、国内でも有数のものです。この内、中津市の沿岸部分を22年前に当会が「中

津干潟」と名付けました。沿岸の長さは約10km、面積は約1,350ha、潮の干満差4mのとても広い前浜干潟です。砂泥質の干潟ですが潮が大きく引く時には沖に3kmほど歩いて行くこともできます。



中津干潟地図

3. 中津干潟に暮らす生きものたち

「中津干潟」には日本各地で絶滅してしまった貴重な生きものたちが生息しています。当会によるこれまでの調査で814種が数えられ、その内3割ほどが絶滅危惧種などの希少種となっています。代表的なものに、カブトガニ、アオギス、ミドリシャミセンガイ、ナメクジウオなどがいます。これ以外にも、地元の地名のついたオオシンデンカワザンショウなどの小さな巻き貝やシマトラフヒメシャコの巣孔に共生しているニッポンヨーヨーシジミなどの不思議な生きものたちもいっぱいいます。



カブトガニ



アオギス



ミドリシャミセンガイ



ナメクジウオ



オオシンデンカワザンショウ



ニッポンヨーヨーシジミ

瀬戸内海で最大級のラグーン（潟湖）もあります。名前を三百間の浜と言いい、地形的には砂嘴と呼ばれるもので東西に600mほど砂州と湿地が広がっています。ここには、シオマネキ、オカミミガイ、センベイヤワモチなどの特徴的な希少種があふれるように暮らしています。



シオマネキ



オカミミガイ



センベイヤワモチ

もう一つ注目しておきたいのは渡り鳥です。毎年数千キロから時には1万キロを越える旅をする渡り鳥たちが、一時羽を休めたり、長期間ゆっくり過ごしたりする国内に残された数少ない場所の一つになっています。特にシギ・チドリ類はおおむね全国2位の数を維持しています。ピーク時には2〜3千羽を数えるハマシギをはじめ、ダイゼン、キョウジョシギ、ダイシャクシギなど多種多様な鳥たちが立ち寄ります。この他にも、ズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ツクシガモ、ヨシガモなどの希少な鳥たちも見るすることができます。

開発などによって、この70年ほどの間に日本の干潟の4割が消滅しました。干潟環境に適応している生きものたちは生息地を追われ、多くが息絶えました。今、渡り鳥も数を減らし、安心して生活できる場所を必死に探して生きています。おそらく、彼らの最後の砦の一つが中津干潟なのです。



ダイゼン



キョウジョシギ



ダイシャクシギ



ズグロカモメ



クロツラヘラサギ



ツクシガモ



ヨシガモ

4. 中津干潟の歴史・文化

私たちは、人と自然の豊かな関係を取り戻すことを目指しています。だから、歴史や文化などにも注目し

て活動してきました。失ったものを取り戻すためには、私たちに何が残され、何を無くしてしまったのかを学ぶ必要があります。

人と自然の関わりという視座から中津干潟について語ることができるのは、縄文時代くらいからでしょう。中津市内にもいくつか貝塚が残されていて、その中の一つ縄文後期の「植野貝塚」から出土した貝類を調べると、今の貝類の相とほとんど同じであることが分かりました。言いかえるなら、古代から変わらない自然が今も残されていると言うことができそうです。

もう少し時代を下っていくと面白い出土品と出会えます。古墳時代ごろから見られるのが「たこ壺」です。イダコを捕るための漁具ですが、この時代から私たちのご先祖様は知恵をしぼって干潟の幸を手に入っていたのです。ちなみに、この頃からのたこ壺漁を行っていたのは、大阪湾から播磨灘にかけてと豊前地域だけです。このたこ壺を手作りの窯で焼き、実際に漁を行い食すワークショップを開いたこともあります。

漁業については記録が少なく、よく分かっていませんが、干潟環境に特徴的な漁法として「ささひび漁」があります。これは、潮の干満を利用した漁法で、山の笹竹を集め、陸側を広く沖側を狭くした形に柵をつくり、引き潮の時に魚介を自動的に追い込むという単純な仕掛けです。干満差の大きい干潟の特性を利用した面白い漁法でしたが、より儲かる海苔養殖が広がると衰退していきました。当会では、短期間ではありますが、行政の援助の下、漁協など協力してこの漁法を再現しました。



たこつぼ体験



ささひび

中津干潟の採貝業は、1985年ごろに日本一の水揚げ高を記録する豊かさを誇りましたが、ポンプ漁による乱獲、河川や港湾などの大規模な改変、水温の上昇など様々な要因が影響して、アサリを中心にほとんど捕れなくなりました。それでも、日本古来のハマグリなどは今でも採取できますし、商品としての価値は低いものの生態系を支える希少で多様な貝類は今もしっかり生息しています。



植野貝塚出土ハマグリ

地域の歴史、文化を知る試みは、私たちのアイデンティティーを確立するためにとっても大切な作業だと考えています。情報機器が急速に発達したことで、現実より仮想世界との関係が強くなってしまった現代社会の中で、根無し草のように漂流することなく、しっかりと地に足をつけて歩いて行くために欠くことのできない学びだと思っています。

5. 活動のはじまり

私たちの活動は、22年前の1999年に始まりました。当初は、故・足利由紀子代表をはじめ、わずか5～6名

の小さな集まりでした。活動の中心は干潟の自然を正しく知り、それを人々に知らせることにありました。一市民の立場から干潟とはどのような場所なのかを科学の目を通して探っていました。

干潟の中に足を踏み入れてすぐに、底生生物としては最大級の重さと大きさをもつ生きものを見つけました。それは、手のひらに乗るような小さなカブトガニの幼生でした。2億年前から姿を変えず、地球環境の激変に耐えながら命をつないできた、この生きものに触れた瞬間、足利には天啓のように強い意思が宿ったといいます。「ここは守らなければならない」。

活動を始めたきっかけは、干潟を埋め立て、人工の砂浜をつくって地域の振興を図ろうとしていることを知ったことでした。これは、重要港湾に指定された中津港の開発が進む中で、地元地域にも何らかのメリットを与えるべきだという機運の中で生まれた開発計画でした。

当時の海に関わる社会的な状況は、採貝業などの干潟を代表する漁業が斜陽となり、また、アオサの大発生などで、かつての豊穡の海は異臭の漂う無価値な場所として捉えられるようになっていました。また、衰退した海浜地域の経済的振興が強く求められていました。その時はまだ「中津干潟」という言葉はありませんでしたし地元の海が「干潟」であるという意識も低い状態でした。そして、そこはもう幸を与えてくれなくなった「海」であり、お金にならない「浜」でした。

そのような中、港の規模拡大や埋め立てに対して環境保護や景観保全の観点から開発に強く反対する人々がいました。同時に、地元の経済的な発展を願う政治家や経済人などもありました。その時、私たちは、賛成、反対を言う前に「事実を知ってもらう」ことを重視しました。とにかく干潟の中に入って、そこがどのような場所なのか、なぜ保全しなければならないのかについて目の前の海を「中津干潟」と名付け理解を促す活動をはじめたのです。

具体的には、地域の人々や子どもたちが干潟の自然を学ぶための観察会を何度も開きました。そこには、干潟の自然の価値を正しく知ってもらうことができれば、人々は安易に無用な埋め立てなどを選択することはないという信念がありました。そして、人々の良心を信じて学習会や観察会を重ねて行いました。同時に生息する生物の科学的調査を始めました。その結果次々と他の地域では絶滅したり数を減らしてしまった希少種を

発見していきました。これまで、研究者に注目されることも無く、ほとんど調査も行われていなかったことから、調べれば必ず新発見があるというびっくりするようなフロンティアがそこに広がっていたのです。

活動をはじめた頃は、河川法や海岸法、港湾法などの改正が次々と進められていました。時代は、単純に防災や経済発展ばかり考えてきた状況に疑問を呈し、市民参加や自然環境の保全を考えることを求めるようになったのです。環境問題の捉え方も、それまでのような「起きてしまった公害への対応」ではなく、「自然とともに生き続ける術」をみんなで探っていくという方向に変わっていきました。

私たちの活動への理解も、徐々に人々に広がっていきました。最初は敵対的であった漁業者や政治家の中にも、ともに酒を酌み交わし対話を繰り返す内に、逆に良き理解者に変った方々も出てきました。

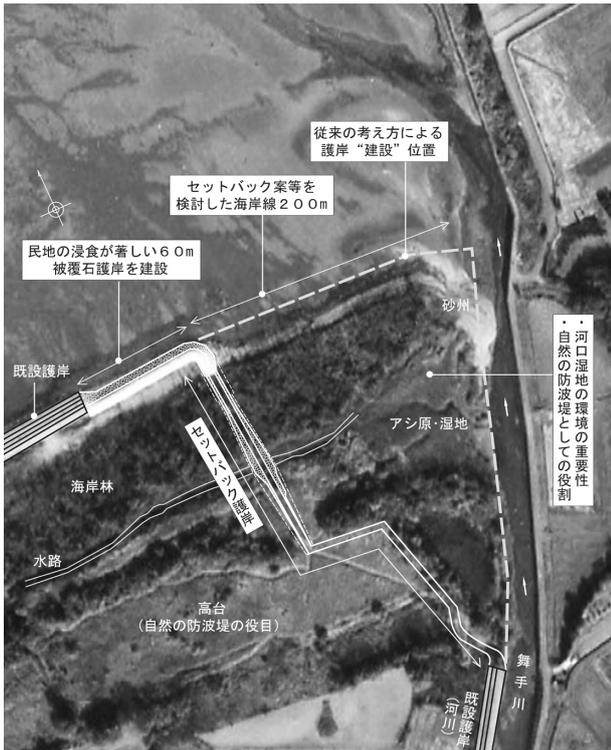


中津港大新田地区環境整備懇談会

結局干潟を砂浜にする計画は白紙にもどされました。同時に、話し合いの中で海岸のコンクリート護岸整備が諸事情により中断している場所があることがわかり、にわかに自然海岸が残されている場所に注目が集まりました。舞手川の河口がそこで、私たちの調査によって中津干潟の中でも重要なカブトガニの産卵地と幼生の生息地であることが分かりました。

予定されていたコンクリート護岸工事は棚上げされ、大分県土木事務所や国土交通省などの行政関係者、政治家、漁業者、環境保護団体、市民などが一幕のテントに集い現地で議論する場などが設けられました。安全・安心のために護岸工事は予定通りコンクリートで固めるべきだという意見がありました。また、せっかく残された優れた自然環境を残すべきで護岸工事は中止すべきだという人もいました。

最終的に会議は、安全・安心を確保しながら、自然環境も保全するという「ハイブリッドインフラ」を選択しました。その名前を「セットバック護岸」と言います。自然石を使い地下水の流れを遮らないように工夫しつつ陸側に護岸を建設し、海側の砂浜や塩性湿地を残して、その緩衝機能も活かすというものでした。近年「グリーンインフラ」などの議論が始まっていますが、今から20年も前にこれを実現させていたことは注目してもよいのではないのでしょうか。



セットバック護岸図



セットバック護岸写真

6. 広がる活動

当会の目的は「中津干潟の保全」です。埋め立ての危機は去り、セットバック護岸も完成したことから一定の目

的は達成されました。この時、会を解消してもおかしくはなかったのですが、活動はさらに広がりを見せていきました。

その頃から使われるようになったモットーがあります。「生きもの元気、子どもも元気、漁師さんも元気な中津干潟を100年後も…」この言葉は、希少な自然が残されているこの素晴らしいフィールドを未来にそのまま残すためにはどうしたらよいか考え抜いて出てきたものです。

まず、中津干潟の保全を進めるために必要なのは、世間によく見られるような雰囲気だけの自然礼賛では不十分で、事実に基づいた科学の目で自然環境や生きものを調査、分析、記録しなければならないと考えました。そして、そこで得られた事実に基づきながら、できるだけ多くの人々に中津干潟のことを知ってもらい、ふれあって、楽しんで、好きになってもらえるような活動を実施しました。さらに、中津干潟で生活を営む漁師さんたちが、元気で生業し漁労文化を次の時代に継承できるようにしなければ目的は達成できないと考えるようになりました。このように、事実に基づいて考え、人々の共感を得ながら、経済活動も視野に入れつつ保全活動を行うことが、今の、そして未来の生きものや人々の幸せにつながると信じるようになりました。

活動1年目の頃、調査活動中に1頭のスナメリの死骸が砂浜に打ち上げられているのを見つけました。専門家に調査を依頼すると、小さなプラスチック片が胃に刺さったことが原因で死んでしまったことが分かりました。それまで私たちは中津干潟の素晴らしさを伝えようと調査と観察会に没頭していましたが、この事実を知り、果たしてそれだけでよいのかという問いが頭をもたげました。



スナメリの死体

そして、ごみまみれの海岸をにらみながら、ともかく拾ってみようとビーチクリーン活動をはじめました。これも5~6人からのスタートでしたが、数年後には毎回200人超の人々が集う大きな活動になりました。今では年4回1,000人近い人々がこの活動を支えています。



ビーチクリーン

小学校などでも中津干潟の自然や海ごみ、干潟をつくる山の水源や川、里山のため池に残された希少な自然などを一緒に学び、体験し、好きになってもらう活動を広げています。年間のべ2,000人ほどの子どもたちが参加しています。



雑木を片付けるボランティア

近年は、干潟の入り口に広がる松林の再生活動も行っています。この30年余りの間に海岸の松林は荒廃が進んでしまいました。石油や電気の普及で人々の生活様式が変わり、松林から燃料を採取する必要がなくなってしまうことが原因です。昔は人々が日々の焚き付けを得るために松葉かきに集い、林床は美しく保たれていましたが、少しずつヤブが広がり不法投棄の巣窟となっていきました。



荒廃する松林

人と海との関係を取り戻し白砂青松の風景を再生したいと3年間、雑木を伐採し、汗まみれで草を刈り、ボランティアの皆様のお力を借りて、かつてのような風景を取り戻しました。一部に過ぎませんが3年頑張れば元の姿に近い形に戻せるという学びを得ました。9年目の今も30年前まで行われていた春の浜遠足を復活させようがんばっています。



松葉かき

長期にわたって中津干潟を調査してきた関係で、研究者や大学とのつながりが生まれました。メディアエターとして行政や漁協などの調整を行ってきたこともあり、4年ほど前から市民、漁業者、研究者などが一堂に会し対話するイベント「中津干潟アカデミア」を開催しています。中津干潟の幸を食べながら、最新の研究成果について話し合っています。

7. 今後の展望

私たちの目標は、100年後の子どもたちに豊かさの残る中津干潟を今のまま手渡すことにあります。自然の



中津干潟アカデミア

富を先取りすれば、ツケは子どもたちに回されます。もしかしたら私たちは、今そのツケを不漁や気候変動の形で、すでに払わされているのかも知れません。

そう考えてみると現代を生きる我々が、自然が与えてくれる豊かさを使い切ってしまうことは許されないと思えてくるはずです。遠い未来の子どもたちが今と同じ豊かさを甘受できるように、謙虚な気持ちで上手に自然つきあっていくことが求められているのです。

当会は、この目標を現実のものとするため、中津干潟が何らかの保全の公的な枠組みの中に取り入れてられるよう努力していきます。人々にその価値を説きながら、私たち自身も一緒に干潟の自然を学び、楽しみたいと思っています。そしてこれからも、みんなが中津干潟のことを大好きになってもらえるような活動を続けていきます。



干潟観察会

特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会